

述語動詞のル形の文法機能

結果可能表現との関連から

張 威*

キーワード： 結果可能，ル形，状態変化，意図，無標

要 旨

本稿は日本語の述語動詞のル形と結果可能の意味を実現することとの関連性を考察することによって、日本語の述語動詞のル形がもっている文法機能について、先行研究と違う立場から分析を試みようとするものである。そして、このような研究によって、いわゆる結果可能表現という新しいテーマの研究に理論的根拠を提供することを目的とする。

いわゆる結果可能表現とは、動作主がある種の状態変化を実現しようと意図して動作・行為を行なった結果、主体的または客観的条件によって動作主の意図した事態、またはある種の状態変化が動作主の思い通りに実現し得るかどうかを表わす表現である。

本稿の考察によって、動的事象を表わす動詞であれば、いずれも結果可能表現の述語を担う可能性があるということが明らかになった。そして、このような事実を根拠として、日本語の動作性述語動詞のル形には〈状態変化〉を表わす機能が備わっている、という新しい見解をも提示した。

1. 結果可能表現とは

可能表現の中には、結果可能表現という一類がある¹。いわゆる結果可能表現とは、動作主がある種の状態変化を実現しようとして動作・行為を行なう場合、動作・行為が為された結果、主体的または客観的条件によって、動作主に意図された目的、すなわち、ある事態またはある種の状態変化が動作主の思い通りに実現することができるかできないかを表わす可能表現である。

結果可能表現はその表現形式からいえば、従来より日本語学の世界で認められてきた可能のメーカー²を用いず、述語動詞の基本形(以下、これを述語動詞のル形と呼ぶ)またはその否定形である「一ナイ」の形式によって可能の意味を実現する表現であり、それゆえ、結果可能表現は無標(unmarked)の可能表現であるということもできる。

* ZHANG Wei: 名古屋大学大学院文学研究科博士課程(後期)在籍。

¹ 詳しくは張(1991b)を参照。

² 例えば、一れる(られる)・一得る・一できる・一することができる・可能動詞など。

可能表現は基本的には、〈コト内部の可能〉と〈モダリティの性格をもつ可能〉という二つの種類に大別することができる³。いわゆる〈コト内部の可能〉というのは、すなわち文の言表内容に属する可能のことである。この種類の可能に限っていうならば、動作主の意図の実現が、可能という文法的カテゴリーの本質である。

〈可能〉は〈希望〉の結論である⁴。動作主の意図は言い換えれば、動作主の希望でもある。ここでいう動作主の希望はある動作・行為の実現であることもあれば、その動作・行為によってある種の事態または状態変化を実現させようとするということでもある。ある種の事態または状態変化を実現させることが動作主の意図である場合、その表現は、結果可能の意味を表わすこととなる。

例えば、

(1) この薬を飲めば、一週間で治る。

(2) ブレーキをかけても、車が止まらない。

(1) と (2) はいずれも結果可能表現である。前者では、「病気が治る」ことが「薬を飲む」人の意図した事態であり、後者では、「(走っている)車が止まる」ことが「ブレーキをかける」人の希望する状態変化である。そして、(1) は「この薬を飲む」という手段を取れば、「(病気が)治る」という動作主の実現しようとする目的は「一週間で」達成することができる、(2) はたとえ「ブレーキをかける」という車を止まらせるための措置をとるにしても、「車が止まる」という動作主の意図が実現できない、ということの意味している、と解釈することができる。

このように、ある種の意志的動作が行なわれた後、動作主のもとより意図した事態またはある種の状態変化が結果的に実現することができるか否かを取り上げる表現が結果可能表現である。

2. 問題の所在

筆者は張(1992)で結果可能表現の統語的特徴について考察を行なった結果、次のようなことが明らかになった。

- A. 結果可能表現は必ず述語動詞のル形またはその否定形によって表わされる。
- B. (1), (2) のような主体の変化を表わす変化動詞のほかに、主体の動作を表わす動作動詞が述語である表現においても、必要な条件が備わっていれば、結果可能の意味を表わすと認められる場合がある。

例えば、

(3) あやまっても、許してくれない。

先行研究によれば、(3) は可能表現ではない。いうまでもなく、この表現は可能の意味を表わ

³ 張(1991b), pp. 238-240 を参照。

⁴ 森田(1977), p. 479.

してはいないと解釈される。しかし、結果可能表現の論理に従ってこの表現を分析すれば、次のような解釈も成り立つものと思われる。

つまり、(3) では、「あやまる」という動作の主体が相手に許してもらおうとしている。そこで、「(相手が)許してくれる」という事態の成立することが動作主の実現しようとする目的である。そこで、動作主は、「あやまる」という動作を手段として、この目的を達成させるために努力しようとした。ところが、現実には、たとえ「あやまる」という動作が行なわれたとしても、動作主の意図した目的は所詮実現することが不可能である、というのが(3)の表現で表わそうとする意味であると解釈するのである。このような立場からすると、述語動詞のル形またはその否定形である「一ナイ」の形式によって結果可能の意味を表わす用法は、決して語彙的なレベルで変化の意味を表わす動詞のみに限られるものではなく、それは動的事象を表わす動詞全体にあり得る用法であるのかも知れない。仮にそうであるとすれば、無標の形で可能の意味を表わすことは、動的事象を表わす動詞に共通して見受けられる普遍的な現象であるといわなければならない。

ところが、何故、動的事象を表わす動詞には、このように可能のマーカ―を用いずに可能の意味を表わす用法があり得るのであろうか、このことは結果可能表現の研究において、是が非でも解き明かさなければならない大きな問題である。

結果可能の意味に関しては、従来の研究は主として述語動詞の語彙的特徴に目が向けられていた⁵。このような方法は、結果可能表現の主流である有対自動詞表現が結果可能の意味を表わす場合の意味構造を分析する際には、極めて有効である。

しかし、上で述べたような問題を解明するためには、述語動詞に備わっている語彙的特徴を取り上げるだけでは明らかに不十分である。よって、結果可能表現の研究に際して、表現の述語を担う動詞の語彙的特徴のみにとどまらず、同時にその動作の形態的側面にみられる文法的特徴についても考察を進めることが必要になるであろう。

そこで、本稿は述語動詞のル形と結果可能の意味との関わりを考察の対象とし、結果可能表現の立場から述語動詞のル形の文法機能を検討することとする。そして、このような考察と検討により、何故、動的事象を表わす動詞には、可能のマーカ―を用いずに可能の意味を表わす用法があり得るか、という問題の解決に理論的な根拠を提示することを目的とする。

3. 述語動詞のル形と結果可能の意味との関わり

3-1. 〈結果可能〉弁別三要点について

述語動詞のル形と結果可能の意味との関わりを考察する時、しばしば結果可能表現であるかど

⁵ 「結果可能」の研究は、日本語文法論の研究テーマとして、張(1991a)で最初に取り上げられたものである。ここの「結果可能の意味に関するこれまでの研究」は、張(1991a, 1991b, 1992)を指す。

うかを判断する必要がある。よって、述語動詞のル形が結果可能の意味を表わしているか否かを正確に判断するのに、どうしても明確な基準が必要となる。

本稿の冒頭で、結果可能表現の定義を記しておいた。その定義は結果可能表現に、どうしても欠かすことのできない要素として、次の三つのポイントを示している。

1. 結果可能表現で取り扱われているのは、動作・作用ではなく、事態の成立または状態変化である。
2. その事態の成立または状態変化は動作主の意図したもの（すなわち、動作によって実現しようとする目的）でなければならない。
3. たとえ、動作主の意図した事態または状態変化を取り上げた表現であっても、その事態または状態変化が動作主の希望通りに実現された場合、結果可能の意味を表わすことにはならない。

この三つのポイントは三位一体であって、結果可能の意味を実現するための基本条件を構成している。三つの基本条件の中のどの一つであっても合致しないものがあれば、結果可能表現として判断されることができない。したがって、本稿では、この三つのポイントを、結果可能表現を判別するための優れた基準として捉える。そして、これを一つの概念にまとめて「〈結果可能〉弁別三要点」と呼ぶこととする。

3-2. 述語動詞の種類及びそのル形が表わす意味

日本語の動詞はそれが表わす語彙の意味から、まず、状態または状態性を有する事象を表わすものと動作・作用・変化などのような動的事象を表わすものとに大別することができる。前者は状態性動詞であり、後者は動作性動詞である。動詞の文法的意味を検討する場合、このように性格が異なる種類の動詞を区別して扱う方法が極めて有効であり、動詞の研究においては必要不可欠の手順ともいえよう。

動詞の分類については、基準と立場によって、様々な類分けが為されている。その中で、金田一(1955)は日本語の動詞をまず「状態動詞」、「動作動詞」、「第四種動詞」に分け、その後「動作動詞」を更に「継続動詞」と「瞬間動詞」に分けた。基本的にいえば、本稿でいう〈状態性動詞〉は金田一の分類のうちの「状態動詞」と「第四種動詞」に、〈動作性動詞〉は「継続動詞」と「瞬間動詞」に相当する。

3-2-1. 状態性動詞の場合

すでに前述したように、結果可能は事態または状態変化の実現を取り上げることに特徴がある。端的に言えば、ある種の〈変化〉を表わすことは結果可能の意味を実現する言語形式に必須の意味素性の一つである。

しかし、状態性動詞を観察してみれば解るように、この種類の動詞の語彙的性格により、〈変化〉の事象が動詞の表わす対象から排除されている。このような事実から、状態性動詞は〈変化〉の事象とは無関係である、あるいはそれを無視する動詞である、ということができる。

- (4) 大学の構内には生協の売店がある。
- (5) 休日はいつも家にいる。
- (6) 太郎はフランス語も話せる。
- (7) あの子はよく勉強ができる。
- (8) 歩いて行けば、時間がかかる。
- (9) この仕事はかなりの技術を要する。
- (10) 彼のお父さんは私の叔父に当る。
- (11) 虎はネコ科に属する。
- (12) これらの単語は発音は同じでも意味が異なる。
- (13) 老人と幼児もその中に含む。
- (14) お茶は玉露に限る。
- (15) その服は君によく似合う。
- (16) それも時と場合による。

(4)~(16)で下線の引かれた動詞はいずれも状態性動詞である。そのうち、(4)と(5)は「存在」を、(6)と(7)は「能力」を、(8)と(9)は「必要」を、(10)~(16)は何らかの「関係」を表わしていると考えられる。これらの動詞に共通してみられる特徴といえ、まったく静止的な事象を表示しているということであり、そして、それらの動詞が表わしている事象はいずれも時間の流れの中で捉えることが不可能であり、いわば時間を超越した概念を表わしているものである。

状態性動詞の中には、また動詞のル形を用いず、常に「~ている」または「~た」の形を用いて状態を表わすものがある。金田一(1950)によって指摘されているように、この種の動詞は時間の概念を含まないという点において、(4)~(16)で取り上げた動詞と相通じている⁶。

- (17) メインストリートの両側に高い高層建築がそびえ立っている。
- (18) 彼はいろいろな点で私より優れている。
- (19) イギリス人は青い目をしている。
- (20) この子は年のわりにしっかりしている。
- (21) このホテルは客に対するサービスが行き届いている。
- (22) うちの子は父親に似ている。
- (23) 象は牙が口の外につき出している。

(17)~(23)で下線の引かれたところの動詞には、ル形を用いて文を終わらせる用法がほとんど

⁶ 金田一(1950), p. 8.

見当らない。これらの動詞は、(4)~(16)の場合と同じように、時間を超越したある種の状態を表わしているものであり、語彙的なレベルでいえば、結果可能表現で問題とされている〈変化〉の意味とは、何らの関係ももたないものである。

このように、状態性動詞は、その表わしている事象には動きと変化が伴わず、静止的事象である状態、またはある状態を帯びることを意味するところからみれば、形態論的には動詞の類ではあるが、意味論的にはむしろ形容詞的な性格を多分にもつものである、といわなければならない。

したがって、この種の動詞は、原則的には、動作主の意図した状態変化を取り上げる結果可能表現の表わす意味にはそぐわないものであり、無標の形で可能の意味を表わす表現の述語を担う資格が与えられていないものであるということができる。

しかし、状態性動詞はまったく結果可能表現に無縁であるかといえば、必ずしもそうではないようである。

上に述べたことが原則であるとするならば、場合によっては、その原則からはみでる例外の状況が存在するかもしれない。次の例をみてみよう。

(24) 来年になると、北京の長安街にうちの会社のビルがそびえたつよ。

「そびえたつ」という動詞はある状態を帯びることを表わす状態性動詞である。すでに言及したように、この動詞は原則的には動きや変化を表わさず、そして一般には、「～ている」または「～た」の形式で用いられる。しかし、(24)のように「ル形」がそのまま用いられる例は、限られた場面とはいえ、許容の余地があるであろう。

(24)の意味を分析してみれば明らかであるように、話し手がこの文を発話する時点においては、「北京の長安街にうちの会社のビルがそびえたつ」という事象がまだ成立していない。「来年になる」という条件が満たされれば、上に述べた事象が成立する(ことになる)んだよ、というのが、(24)の表現で伝達しようとする情報である、と考えられる。

そこで、(24)においては、「北京の長安街にうちの会社のビルがそびえたつ」という事象が「来年」の時点で未成立の状態から成立済みの状態へと変化することが取り上げられているということになる。

ここで特に注目されなければならないことは、「そびえたつ」のような本来時間の流れの中で捉えられない事象を表わす動詞の場合でも、一定の situation の中で、ル形を用いて〈変化〉の概念を表わすことがあるということである。この事実は、述語動詞のル形と結果可能との関連を明らかにする上で極めて示唆的なものであり、後で動作性動詞のル形の文法機能を考える際に、あらためて詳細に検討を加えることにする。

上述したように、仮に(24)では、すでにある種の〈変化〉が取り上げられているとすれば、この表現は結果可能表現になる可能性も有するはずである。そこで、〈結果可能〉弁別三要素を基

準に、次のようなテキストを設定して、検証してみることにする。

- (25) この計画を着実に実行すれば、三年後には、北京の長安街にうちの会社のビルがそびえたつよ。

日本のある会社が、例えば三年計画で中国北京の長安街に高層ビルを建てようとしていて、社長がその計画書を部下に見せながら、(25) のように発話したとする。この表現では、「三年後には、北京の長安街にうちの会社のビルがそびえたつ」という事態が成立するということは動作主（すなわち「この計画を実行する」会社側）の実現しようとする目的である。この目的を達成させるために、動作主が「この計画を着実に実行する」という動作をすることが必要である。したがって、動作主の〈意図〉と〈動作〉、そして動作によってもたらされる〈結果〉のこれら三者が有機的な関係にあるということは明白である。

したがって、(25) は、話し手（社長）が、「この計画を着実に実行する」という動作をすれば、「三年後には、北京の長安街にうちの会社のビルがそびえたつ」という動作主の意図した事態が成立することが可能である、という情報を部下に言い伝える表現である、と解釈することができよう。

もっとも、(25) のように状態性動詞が述語を担う結果可能表現は、極めて限られた場面で成立する例外的な表現であるということ是否めない事実である。それにしても、上の分析によって検証されたように、これは語彙的に〈変化〉の意味と関わりをもたない状態性動詞であっても、特別な場合においては、そのル形が〈状態変化〉を表わすことがあるということの証拠にはなるであろう。

3-2-2. 動作性動詞の場合

いわゆる動作性動詞とは、つまり動作・作用・変化などを表わす動詞である。鈴木(1957)はこの種類の動詞について次のように述べている。

「動作性動詞は動き(動作, 作用, 活動), つまり, 状態の変化を表わす動詞であって, 大部分の動詞はこれに属する。」⁷

この記述で興味深いのは、動作・作用も“状態の変化”として捉えられているということである。しかし、この「状態の変化」が一体どのような概念を意味するものであるかについては、鈴木(1957)には明確な説明が見当らない。だが、鈴木が状態性動詞のことを「変化をとまなわなない動詞である」⁸と定義しているところからみれば、鈴木(1957)でいう「状態の変化」は、動詞が動作性のものなのかそれとも状態性のものなのかを見分けるための基準を表わす用語であり、それは広義の「動作」という用語と同じように動きを意味するものであり、結果可能で扱われて

⁷ 金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』, p. 68.

⁸ 同上書; p. 71.

いる〈状態変化〉とは本質的に異なる概念である、ということが解る。

それにもかかわらず、このように、動作・作用をも状態の変化として認めようとする捉え方は、本稿の論考にとって極めて参考になる。

動作性動詞は下位分類として、a) 主体の動作・作用を表わす動作動詞と b) 主体の変化を表わす変化動詞に分けることができる。そこで、次にまず動作動詞のル形と結果可能の意味との関連について考察してみる。

3-2-2-1 動作動詞のル形と結果可能

- (26) 山田さんはゴルフが大好きで、月に2回は必ず行く。
- (27) お父さんは毎日、朝ご飯の時に新聞を読む。
- (28) 朝夕のラッシュアワーには、2分おきにバスが来る。
- (29) あの店は毎日10時に開店する。
- (30) 地球は1年間で太陽の回りを1周する。
- (31) 水は100度で沸騰する。
- (32) 太郎は来年の5月に花子と結婚する。
- (33) お客さんはもうすぐ来る。
- (34) 東海地方は今晚から雨が降る。
- (35) 後1週間ぐらいすれば、桜の花が咲く。
- (36) 変だな。誰もいないはずなのに足音がする。
- (37) 風邪を引いて寒けがする。
- (38) 故障の原因はモーターにあると思う。
- (39) 私はあなたの言うことを信じる。
- (40) そんなことをしては困る。
- (41) あの人のわがままにはまったく腹がたつ。
- (42) 僕はあの人の誠意を疑うよ。
- (43) 私は伊藤さんの意見に賛成する。

(26)~(43) はいずれも動作動詞のル形で文を終える用例である。そのうち、(26)と(27)は「現在の習慣」を、(28)と(29)は「繰り返しの出来事」、(30)と(31)は「真理」、(32)~(35)は「未来に確実に起こる出来事」、(36)と(37)は「現在の知覚」、(38)と(39)は「現在思っていることがら」、(40)と(41)は「現在感じていることがら」、(42)と(43)は「現在の態度」を表わしている。そして、(43)のように、動作主の意志によって行なわれる動作を表わす動詞の場合、動作主が第一人称である時は、動詞のル形が動作主の意志を表出することになる。

上に記された用法の他に、動作動詞のル形は、次のような場合にも用いられる。

一つは物の作り方や使い方を説明する時。

例えば、

- (44) 柔らかくしたバターに砂糖を加えよく混ぜる。バターが白っぽくなってきたら塩を一つまみ入れる。そしてレモンの皮も加え、よく混ぜる。(ドーナツの作り方)
- (45) ① イジェクトボタンを押してカセットカバーを開きます。② カセットを装着してカセットカバーを閉めます。③ 録音ボタンを押し、電話機に向かって話して下さい。④ メッセージを話し終わったら録音ボタンをもう一度押します。(留守番電話の使い方)

もう一つは、いくつかの事柄を例として示す時、

例えば、

- (46) 起きたらまず顔を洗う。それからソファーに座ってゆっくり新聞に目を通す。その後、近所をブラブラ一回りする。これが私の1日の始まりである。
- (47) 共通の話題を見出すための探り方。
- 天候を話題にする。
 - 紹介者との関係を話題にする。
 - 住まい、郷里、出身、趣味、職業などを、礼を失しないよう気配りして聞く。相手がばかすようであれば深く立ち入らないこと。
 - 紹介者から聞いていることを話題にする。

ここまでの内容を整理すると、次のようになる。

動作動詞の語彙的意味素性は主体の動作または作用を表わすことであり、そして、動作動詞のル形が表わす文法的意味は上に例を挙げて示したように、

- A. 現在の習慣。
- B. 繰り返しの出来事。
- C. 真理。
- D. 未来に確実に起こる出来事。
- E. 現在の知覚、現在思っていることがら、現在感じていることがら、現在の態度。
- F. 動作主の意志。
- G. 物の作り方や使い方を説明する時。
- H. いくつかの事柄を例として示す時。

にまとめることができる。

動作動詞のル形のもっているこれらの文法的表現機能は、いずれも従来多くの研究者によって論じられてきた⁹ことである。

⁹ 例えば、金田一(1955)、鈴木(1957)、寺村(1984)など。

ところが、これまでみてきたように、動作動詞の語彙的意味素性からであろうと、またはこの種の動詞のル形の文法的表現機能からであろうと、本稿で取り上げている結果可能の意味に関わっているような性格はどこにも見当らない。それでは、この種の動詞は、無標の形で結果可能の意味を表わすことがないとみてよいであろうか。

すでに 2. で言及したように、一見結果可能の意味と無関係のようにみえる動作動詞の場合であっても、必要な条件さえ満たされれば、結果可能の論理で解釈可能な用例が現に存在することは事実である¹⁰。

張(1992)の考察によれば、「～(動詞)ば、～(動詞ル形)」と「～(動詞)ても、～(動詞)ない」の両文型は、結果可能の意味を実現するために必要な条件を言語形式のレベルで具体化した基本的構文形式である¹¹。この二つの構文形式は同論文では“「ば」構文”と“「ても」構文”と呼ばれており、結果可能の意味が成立する条件を端的に示しているものである。したがって、無標の形で結果可能の意味を表わす表現を検証する時、これをものさしとして用いると、極めて有効である。

そこで、「ば」構文と「ても」構文を取り上げて、考察を続けることとする。

まず、主体の動作を表わす動詞についてみてみよう。

(48) お母さんがおいしい料理を作っても、その子は食べない。

(48) は母親がおいしい料理を作って子供に食べさせようとしている場合の発話である。この表現においては、「お母さん」は動作主であり、そして「おいしい料理を作る」時には、「その子が食べる」という結果を期待しているのである。この結果は動作主が動作を通して実現しようとする目的、すなわち動作主の動作意図であると考えることができる。話し手が(48)で表現しようとしているのは、たとえ動作主の「お母さん」がその動作である「おいしい料理を作る」ことをするにしても、動作主の意図した「その子が(料理を)食べる」という結果を生じることにはならない、ということである。

このような論理で分析してみると、(48)は結果可能表現として認められることになる。そして、次に上げた(49)～(53)の例についてもまったく同様な方法で解釈することができるであろう。

(49) あなたが勧めても、彼はやらない(よ)。

(50) あの人はプレゼントを贈っても、受け取らない。

(51) うちのおじいちゃんはとても頑固で何を言っても聞かないの。

(52) いくらい環境を作ってやっても、うちの子は勉強しない。

(53) この子は脅かしても、こわがらない。

¹⁰ 例えば、本稿の(3)のような用例がそうである。

¹¹ 張(1992), p. 30.

上の用例はいずれも「ても」構文で結果可能の意味を表わしている。「ても」構文は必ず否定の文末形式を要求するが、結果可能表現そのものが本来否定の形式をとることが圧倒的に多い。この現象は結果可能の意味が発生する原理にその要因があるのかも知れない¹²。一般的に言えば、結果可能表現が肯定の形式で用いられた場合、「可能」の意味が稀薄になるように感じられることは事実である。動作動詞が述語を担う表現において、このような傾向が特に濃厚である。しかし、それにもかかわらず、動作動詞の肯定の形式が述語を担う表現の中に、結果可能表現の用例が存在しないわけではない。

例えば、

(54) もう少しまけてくれれば買うよ。

(54) は買物をする場合に用いられる表現である。いうまでもなく、何とかして客に商品を買ってもらおうとすることは物を売る側の基本的立場であり、商売をする仕事の目的でもある。(54)の表現に即して言えば、お客さんは「私がこの商品を買う」という目的を実現しようとするれば、その目的達成の前提条件として「もう少し値段を安くしなさい」という希望を出しているのである。そこで、「(私がこの商品を)買う」というのが商売をする側の意図した目的であり、「もう少し(値段を)まける」ことがこの目的を実現するために必要な手段である、と考えることができる。このようにしてみると、(54)は結果可能の論理によって解釈されることが可能になる。

3-2-2-2 変化動詞のル形と結果可能

主体の変化を表わす動詞は変化動詞である。変化動詞はこのような意味素性によって、その他の種類の動詞、例えば状態動詞や動作動詞と比べて、結果可能の意味表示に関わりやすいものと考えられる。何故かといえば、変化動詞の〈変化〉を表わす意味素性が結果可能表現の「状態変化を取り上げる」という基本的性格に相通じているからである。よって、変化動詞は結果可能表現の述語になることが最も多く、結果可能表現の述語の主流であるといえることができる。

変化動詞と結果可能との関わりについては、張(1992)に詳細な論考があるので、本稿では、ただ変化動詞が結果可能表現の述語になる用例を上げるだけにとどめ、これ以上考察は加えないこととする。

(55) 計算がどうしても合わない。

(56) この窓から見れば、富士山がよく見える。

(57) 真面目に勉強すれば、きっと成績がよくなる。

(58) 使う人が多いので、電話はなかなかあかない。

(59) 一心に本を読んでいる時は、いくら呼んでも聞こえません。

(60) 停電で電車が動かない。

¹² これについては、張(1991a)に詳しい論考がある。

- (61) この薬を飲めば、血圧は下がるよ。
 (62) いつも運動をしていれば、健康になる。
 (63) この汚れは洗剤で洗えば落ちる。
 (64) これだけの計画は一週間におさまらないね。
 (65) 切符は片道より往復を買えば安くなる。

これまで、述語動詞のル形と結果可能の意味との関わりについて、考察を行ってきた。それをまとめると、次の表で示すような結果が得られる。

述語動詞のル形と結果可能との関わり表

| 状態性動詞 | 動作性動詞 | |
|-------|-------|------|
| | 動作動詞 | 変化動詞 |
| △ | ○ | ◎ |

(左の表は述語動詞のル形と結果可能との関わりを示すものである。この表では関わりの頻度が特に高いものは「◎」、比較的低いものは「○」、特別かつ極端な場合でない限り、結果可能との関わりをもたないものは「△」で示す。)

4. 結果可能表現の立場からみる述語動詞のル形の文法機能

3. で述語動詞のル形と結果可能表現との関連性について考察を行なった結果、上の表で示したように、如何なる性格の動詞であろうと、これが動的事象を表わすものであれば、結果可能の意味を表わす可能性が存在するという結論を得た。しかし、このような事実は、一体どのような理由により支えられているのであろうか。

再三述べてきたように、結果可能表現は、何らかの〈変化〉を表わすものでなければ、必ずその領域から排除されるという性格をもっている。それは「結果可能」の本質により定められていることであり、よって、〈変化〉を表わす意味素性は結果可能の意味を実現するのに不可欠な要素であり、最低限の必要条件でもある。

逆にいえば、ある動的事象を表わす表現が結果可能の意味を表わしていると判断された場合、その表現が何らかの形で〈変化〉を表わしていると考えることができる。

変化動詞の場合は、その動詞の表わす動きが現に行なわれると、必ず主体にある種の変化が伴うので、結果可能の意味が表わせることは容易に解されるが、動作・作用を表わす動詞となると、納得のいくような説明を加えることはそう簡単なことではなからう。

ここで、今一度動作・作用を表わす動詞が結果可能を表わす用例をみてみよう。

- (66) もう少しまけてくれれば買うよ。(動作動詞)
 (67) この子は脅かしても、こわがらない。(作用動詞)

(66) と (67) の述語動詞はそれぞれ「買う」と「こわがる」である。前者が主体の動作を表わ

し、後者は主体の作用、すなわち人間の意志ではコントロールできない動きを表わすものである。この二つの動詞にみられる共通点といえ、動作または作用が行なわれたとしても、主体あるいは対象においては、何らの変化も伴わないということである。言い換えれば、「買う」と「こわがる」のようなタイプの動詞を中心にして構成された叙述内容の中には、〈変化〉を示す要素が存在していないのである。

(66) と (67) が結果可能表現であると判断されるところから、この二つの表現には必ず〈変化〉の意味が関与しているはずではあるが、(66) と (67) の述語動詞を中心にして構成された叙述内容の中には〈変化〉の意味が存在していない、という極めて矛盾した二つの現象が共存している、ということは否めない事実である。そうすると、このような矛盾した不思議な現象が解明されるためには、述語動詞が結果可能の意味を実現する時の言語形式に、問題解決の鍵をみつげざるを得ない、ということになる。

すでに言及したように、結果可能表現は可能のマーカを用いず、述語動詞のル形およびその他の条件¹³によって可能の意味を実現する可能表現である。このことについては、張(1991a)、張(1991b)、または張(1992)の論考により、すでに実証済みのことである。したがって、結果可能表現がその文末形式として、述語動詞のル形しか選ばないという事実も注目されるべきことであり、そして、無標の形で結果可能の意味を表わす表現の秘密を解き明かそうとするためには、この事実の意味分析のメスを入れなければならないことになるであろう。

ところが、日本語動詞のル形に関する先行研究を調べても、動的事象を表わす動詞のル形には〈変化〉を示す機能がある、というような記述はどこにも見当たらない。

日本語動詞のル形に関しては、テンス・アスペクト・モダリティなど、様々な立場から研究がなされてきた。そして、この面の研究は、その歴史からいっても、研究者の数の上でも、あるいは関係論文の量からみても、他の分野の研究に比べて決して立ち遅れてはおらず、むしろ進んでいるといっても決して過言ではない。

だがしかし、結果可能表現の述語を担う動詞のル形については、決して適切に記述されていないということは事実である。この事実は、日本語動詞のル形について、まだ検討を加える余地がある、ということの意味していると考えてよからう。

動的事象を表わす動詞のル形については、鈴木(1957)には次のような記述がみえる。

「動作性動詞の基本態すぎさらずは未来における動きを表わす。」¹⁴

そして、寺村(1984)は、次のように述べている。

「(動的述語の)基本形が、現在はまだ実現していないが、未来に実現が確定視される事象を表わ

¹³ 例えば、表現で取り上げられている状態変化が、動作主の意図したものであるということを示唆する situation の存在がそうである。

¹⁴ 金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』, p. 68.

す。」¹⁵

その他の文献の記述は、これらと大同小異である。その共通点といえば、a) 視点が動詞の表わす動き、具体的にいえば動作・作用・変化に置かれている、b) 動詞の表わす動きは未来において実現するものとして捉えられている、という二つの点が上げられる。いうまでもなく、本稿も、それらは日本語の法則をありのままに記述したものであり、自然言語の姿を正確かつ適切に反映したものであると考える。

ところが、動詞の表わす動きを中心にしてル形の機能を考えるととなると、どうしても動作・作用または変化など、いわば動詞の表わす語彙的な意味に束縛されやすい、という傾向があるように思える。この影響によって、動的事象を表わす動詞のル形と〈変化〉を表わすこととの関連性がなかなかみつからないのも当然である。

次は視点を換えて、動的事象を表わす動詞のル形を考えてみよう。

(66) の述語動詞「買う」に即していえば、この動詞のル形が「買う」という動作が未来に行なわれるという事象を表わす、といってしまえば、「万事休す」であり、〈変化〉を表わすことの説明にはなり得ないが、しかし、「何かを買う」というふうには、「買う」という動詞はある事態を述べるための一要素であるとみなし、その動詞を中核として構成された事態全体にル形がかかっている、というような視点から考えるとすれば、そのル形には〈変化〉を表わす機能が備わっていることが解る。

つまり、(66) では、「(この商品を)買う」という動作が一つの事態として捉えられている。いうまでもなく、(66) が発話される時点では、この事態はまだ未実現のものである。しかし、寺村のいうように、この事態は「未来に実現が確定視」されているものであり、より明確に言えば、述語動詞「買う」のル形が、「(この商品を)買う」という事態が未来の時点において、未実現の状態から実現の状態に変わるという事象を表わしているということである。

「(この商品を)買う」という事態が未成立の状態から成立した状態への転換は、「状態変化」であるからこそ「(値段を)もう少しまける」という動作の主、すなわち商売をする側の意図する目的であり得るのである。要するに、結果可能表現では、如何なる場合においても、動作主が意図しているのは、あくまでも状態変化であり、状態そのものではない。(66) が結果可能の意味を表わすことができるのも、「買う」という動詞のル形には〈変化〉を表わす機能が備わっているという事実によって、裏付けられているのである。

同様な考え方は、(67) のような作用を表わす動詞のル形にも適用される。(67) では「この子がこわがる」が事態の内容である。「こわがる」という動詞のル形がこの事態全体にかかっている。(67) のように、「この子がこわがる」という事態が未来の時点において、未実現の状態から実現の

¹⁵ 寺村(1984), p. 95.

状態に転換しないことを表わすには、ル形のかわりに「一ナイ」の形式をとらなければならない。このような場合、意味的には「一ナイ」もル形の場合と同じように、事態全体にかかるものであると考えなければならない。いってみれば、「一ナイ」はル形の否定形であり、ル形が事態の「未成立→成立」の〈変化〉が未来の時点において生じることを表わし、「一ナイ」はその〈変化〉が未来の時点において生じないことを表わす。両者は、事態の〈変化〉を示す機能においては、表裏の関係にある。

5. ま と め

本稿は日本語の述語動詞のル形と結果可能の意味を実現することとの関わりについて、考察を行なった。その結果、次のようなことが明らかとなった。

- A. ル形を用いて結果可能の意味を表わすことは、動的事象を表わす動詞に共通して見受けられる現象である。
- B. 結果可能の意味を実現させる要因は、述語動詞の語彙的性格ではなく、ル形のもつ文法機能である。
- C. 日本語動詞のル形には、〈変化〉を表わす機能が備わっている。

本稿では日本語動詞のル形について、次のように捉えた。

日本語の動的事象を表わす述語動詞のル形は、従来記述されてきた文法機能のほかに、ある事態が未実現の状態から実現の状態に変わる、というような〈変化〉を表わす側面を有している。動作動詞であろうと、作用動詞であろうと、あるいは変化動詞であろうと、それらが結果可能表現の述語として用いられた場合は、動詞が本来もっている語彙的なレベルの性格が〈事態〉の領域の内にその姿を隠し、表現全体のレベルにおいては、ル形の〈変化〉を表わす側面が活発に機能することになる。

そして、これらの動詞が結果可能の意味を表わさない場合は、動詞の語彙的なレベルの独立性が高くなり、ル形の〈変化〉を表わす以外の文法的性格¹⁶が活発に機能することになる。

本稿のこのような立場によって、動的事象を表わす動詞が何故、無標の形で結果可能の意味を表わせるかという問題を解決することができるようになっただけでなく、日本語動詞のル形について、先行研究の記述と異なる視点から分析を試み、結論として、ル形には〈変化〉を表わす文法機能が存在する、という事実を指摘した。

もっとも、本稿のこのような立場をより広い範囲で実証しようとするためには、述語動詞のみにとどまらず、述語動詞に後続する助動詞、補助動詞、または複合動詞のル形についても考察を

¹⁶ 例えば、「現在の習慣」や「繰り返しの出来事」、「真理」、「未来に確実に起こる出来事」、「現在の知覚・思考・感覚・態度」、「動作主の意志」、「物の作り方の説明」、「事柄の例示」などを表わす性格を指す。

加える必要がある。本稿ではそれらに言及することはできなかったが、それは今後の課題とする。

参 考 文 献

- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」, 『言語研究』 15.
- 金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」, 『名古屋大学文学部研究論集』 X 文学 4.
- 鈴木重幸 (1957) 「日本語動詞のすがた(アスペクト)について——～スルの形と～シテイルの形」, 言語学研究会報告.
- 張 威 (1991a) 「結果可能表現——中日語対照研究の立場から」, 名古屋大学大学院文学研究科修士論文.
- 張 威 (1991b) 「「可能表現の本質」考——無標の可能表現へのアプローチ」, 『中京大学教養論叢』 32-4.
- 張 威 (1992) 「統語上に見られる結果可能表現の成立条件」, 『日本語学』, 明治書院 (近刊).
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』, くろしお出版.
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語 I』, 角川書店.